

## 社会貢献と起業活動

### —21 世紀アジアにおける国際協力とNGOの役割 第3回—

日時:2009年1月24日(土)13:30~

場所:国土館大学 梅ヶ丘校舎 34B301 教室

村田早耶香 (特定非営利活動法人 (NPO)かものはしプロジェクト 共同代表)

みなさんこんにちは。NPO 法人かものはしプロジェクトで共同代表をしている村田と申します。私たちかものはしプロジェクトは、カンボジアの児童買春をなくそうと活動しています。本日はいらしている皆さんのほとんどが大学生のようですが、私は19歳の時にスタディツアーで行った東南アジアで児童買春の現状を知り、それをなくしたいと思って20歳のときにかものはしプロジェクトを立ち上げました。今は27歳、大学を卒業して5年目になります。

学生の時に起業する、というのは可能だと思います。いろんな困難に立ち向かわなければなりません、何より重要なのは、それを乗り越すだけの決意を持つこと、腹を決めることです。私が知っている中でも、三年間収入が全くなく、食べるものもほとんどない中で、それでも社会をよくするために必要なサービスだと頑張ってきた人もいます。私たちもまだ挑戦の途中ですが、ここで今までやってきたことをお話しするのはみなさんの参考にしていただけるかと思います。

今日私が発表する中で、皆さんに最後まで残ってほしいメッセージがあります。それは諦めなければ夢に近づく、ということ。これには、諦めずに思い続けること、諦めずに伝え続けること、諦めずに努力し続けることの三つがあります。この三つをやっていれば誰でも夢に近づけると、自分の経験も顧みて思います。思い続けるというのはとても重要で、私が19の時から思い続けてきたのは、児童買春の被害を少なくしたい、児童買春をなくしたい、ということで、それを周りの人に伝え続けてきたのです。私は年間70回以上、このようなかたちでお話をさせていただいています。児童買春をなくしたいと毎回同じことを伝えているのです。そうしていたら、人が動いてくれたり仲間になってくれたりしました。同じことをひたすら続けて言うのはそれなりに大変ですが、でも繰り返すことで何かが変わります。その努力をし続けることが大事だと思います。

#### ● カンボジアという国

話を始める前に、カンボジアを紹介したいと思います。カンボジアはタイとベトナムにはさまれたインドシナ半島にあります。面積は日本の約二分の一で、人口は一千三百万人ほど。カンボジアの国旗にはアンコールワットが描かれていて、これは日本人が好きな世界遺産ランキング5位以内に入っていますね。カンボジア人にとっても誇りです。すばらしい世界遺産のあるカンボジアですが、アジアの周辺地域で最も貧しい国の一つです。それはなぜでしょうか。みなさんも、ポルポト派とかクメールルージュという言葉聞いたことがあるかと思います。カンボジアはベトナム戦争に巻き込まれる形で内戦が始まりました。70年代にはじまった内戦は20年近く続きましたが、ポルポト派という勢力が75年から79年くらいまで政権を握りました。その際に行われたのは原理共産主義の推進です。都市部にいる人々を農村部に追いやって昔ながらの農業をやらせたり、知識層を虐殺したりしました。それで殺された人の数はだいたい100万から200万人とされています。先生や医者、法律家といった知識を持っていてリーダーシップを取れるひとは、自分たちに反抗する危険性があるということで、ことごとく粛清したのです。その結果、現在のカンボジアは人口の半分以上が18歳未満の子どもであるという状態になっています。本来であれば国を引っ張っていく政治家や先生が絶対的に少ない。復興に時間が掛かっているのは、それも理由です。

この国の状態はとてもひどく、貧困ラインといわれる一日一ドル以下で生活している人口が全体の18.7%もいるのです。一日一ドル以下の生活がどういうものかという、ゴミ山でゴミを拾っている3歳の子供であったり、ストリートで暮らしている子供であったり、家がなくて屋根のある場所で生活できない、一日に一食も食べられない、といったところです。それが全国民のなかの、100人いたら18人いる。とはいえ、これでも少しよくなったのです。それから全体の30%近くしか中学校に進学できません。大学はたったの4%。日本に比べるとあまりに違います。一人あたりGDPはだいたい18万円で、300万円くらいの日本と比べると、あまりに大きな差だということが分かります。

## ● かものはしができるまで

私はちょっと特殊な環境で育ってきました。13歳の時から家で海外からの私費留学生の保証人を引き受け始めたのです。毎年2人から4人ずつでしたが、皆折に触れて遊びに来たり、夏休みにはホームステイを受け入れたりしていました。そんななかで私は、次第に自分はアジアの一員だという気持ちを大きくして入ったんですね。14歳の時に国境なき医師団という活動を知りました。アフリカの農村で活動していた日本人のお医者さんの様子を映像でみたのですが、それまで全く医療を受けられないでただ死んでいくしかなかったひとたちが、お医者さんがひとりいるだけで命が助かった。何百人もです。それを見て、私も将来はそういう仕事をしたいと思い、だから国際交流や国際貢献が学べる大学に進学しました。大学では地雷の問題や食糧問題といったいろいろな国際問題を学んでいたのですが、19歳の時に児童買春という問題を知ったのです。授業で取り上げられたのはタイの15歳の女の子でした。貧しい農村に住んでいた彼女は、都会にいい仕事があるよと言われ親のために働きに出たのですが、結果的にだまされて売春宿に売られたのです。毎日お客さんを取らされて、最後はエイズにかかったので売春宿から放り出され、21歳の時に亡くなっています。その子が最後に言った言葉が、学校に行って勉強したかったというものでした。

そのとき感じたのです。自分は19歳で、親のお金で大学に行って、好きなことをして、好きな洋服を買って、授業は面倒くさいから時々さぼっている。他の国には親のために働きに出て死んでいく人がいる。生まれた国と生まれた家が違っただけなのに、こんなに不公平なことがあっていいのだろうか。適当に学んでいる人間とすごく学びたかった人と、これだけ違う人生を歩んでいるのは何故なのだろう。そう思って、実情を知るためにスタディツアーでタイに行ったのです。そこでいろんなものを見てきた後、カンボジアの方が児童買春がひどいと分かったのでカンボジアにも行きました。正直カンボジアには暗いイメージを持っていたのですが、人が非常に明るくて驚きました。孤児院にもお邪魔したのですが、学校に行って医者になりたいと笑う子もいました。同時に、やはり児童買春の被害がひどいことははっきりしたのです。児童買春の被害者のみが保護されている施設を訪れた際、幼稚園くらいの子が庭で遊んでいるのを見ました。さすがにそれはないだろう、職員の子供だろうと思ったのですが、あの子もそうだとされたのです。その後で行った部屋の壁に、入居している子どもの名前と年齢が書かれた紙が貼ってあったのですが、だいたい何歳くらいだと思いますか？ 10歳とか8歳とか5歳とかなんです。そんな子たちが半年前まで売春宿でお客さんをとらされていたのです。いろんな子どもと話をしました。前の孤児院と比べると皆おとなしかった。そのなかで6歳と12歳の姉妹と仲良くなりました。所長さんが英語で彼女たちにわからないように言っていたのですが、この二人は親の借金のかたに連れてこられ、半年前まで電気ショックを与えられながら無理矢理お客さんをとらされていたのだそうです。親も、売春だと分かっているながら、ほかの兄弟や親族を養うために仕方なく売ったそうです。彼女たちは自分たちのされていることが分からず、嫌がると奥に連れて行かれて電気ショックを与えられたり殴られたりされていたのですが、そこを警察官と一緒にNGOのひとが踏み込んで助けたそうです。腕の傷は癒えた今も心の傷は消えていなくて、夜中に泣き叫ぶので、ぬいぐるみを用意していたり24時間カウンセラーをつきっきりにさせていたということでした。

そのほかにも被害にあった子供の状況を聞いたのですが、40人いたなかで、エイズにかかっているのは二人、自ら命を絶っているのが一人、そして全員がPTSDというトラウマを抱えていました。このように身体的にも心理的にも子供の心と体を傷つけているのがこの児童買春という問題です。

衝撃的かもしれませんが、売春宿の中で撮影したビデオをお見せします。

### <ビデオ・ところどころ解説>

5歳と9歳のこどもです。この子たちを買うのは、先進国のひとたちかカンボジアのひとたちです。

警察官が、NGOのスタッフと売春宿をこじ開けて入ってきています。子どもには何が起きているか分からないので、違う売春宿に連れて行かれるのだろうか、誰かが虐待をうけているのではないかと疑って、非常に混乱しています。ふつうお客さんの前では、泣くと奥に連れて行かれて虐待を受けるので、泣き叫びませんが、これは異常事態なので泣き始めているようです。

こうした売春宿で働いている18歳未満の子供は、カンボジアの国内だけでだいたい8000人から二万人とされています。

## <ビデオ・解説修了>

私が見てきたのは保護された後の子供です。売春宿そのものは外から見たり、実際に働いていたひとの話の聞いたりはしました。エイズで死にそうになっている人にも会いました。現実を見てきて思ったのは、やはりひどいということと予想より小さい子供が被害に遭っているということでした。施設を去るとき先ほどお話しした姉妹が私に、「一緒にいて、日本に帰らないで」、と言ってくれたんです。そのときに私は、この子たちのような、何も悪いこともしていないのに傷つけられてしまった人たちをこれ以上増やしたくない、と心の底から思いました。

### ● 活動をはじめ

帰国してからすぐ、自分のできることを探そうと行動を始めました。まずはそもそも、なぜあのよう人が売られなくてはいけないのかということを知ろうと思い、図書館でありつた本を借りてきました。いろんな子供の体験記やインドやネパールの人身売買の話など、まずは本を読むということから始めたのです。その後、NGOの講演会に参加したりひとと話したりしていたら、ひとつひとつがチャンスと呼んできたんですね。2001年の12月に第二回子供の商業的性的搾取に反対する世界会議というのが日本の横浜で開催されました。これは、世界中から政府要人やNGO関係者、子供若者などが集まって児童買春をなくすために話し合いをしよう、という会議です。そこに、日本から子供と若者の代表を選び、子供と若者に優しい政策にするための意見を出させようということになったのです。その代表は、私が参加していたユニセフ協会の合宿のなかから選挙で選ぶことになってました。それで私は東南アジアで見えてきたことを伝えたいとつたえたとこ代表に選ばれたのです。代表になると日本の外務大臣と法務大臣と直接話をする機会をもらえます。それならもっと学んで、もっと意義のあることを提案しよう。そうしたら少しでも条文が変わる。条文が変わればきっと助かるひとが増える。そう思い、学び直し、できることを考えながら実行してきました。

最初にやったことは、有志で集まって宣言文の草案を作ることです。それから、自分が大学生だったこともあって、若い人にこの問題を伝えたいと考えました。最初は街頭演説をしようとしたのですが、それよりも、せっかく若者ばかりの大学にいるのだから授業で話をさせてもらおうと思いたちました。それが英語の授業で、5分間でいいから時間をください、と先生にお願いしたのです。話す前は、非常に重い問題ですし、まじめぶるなよと野次を飛ばされるかと思ったのですが、実際は皆がきちんと聞いてくれて、ほとんどの人が質問してくれました。結局1時間半全部の授業時間をもらうことになったのです。ちゃんと話せばみんな聞いてくれるんだ、もちろん聞きたくない人もいたでしょうけれども、聞いてくれる人もいるんだと勇気づけられて、私は結局十コマ近くの授業で話をさせてもらいました。その他にも学祭のミスコンをやっている隣でパネルをしたりもしました。会議にはドラフトを持って行って、最終的に出した文書は国連の文書になり、世界中の人が誰でも見られるようになったのです。

会議自体はそれで終わったんですけども、それでじゃあ、明日から救われる子供がいるか、という、その文書をもって政府に働きかけないと何も変わらないということに気がつきました。この問題をなくそうとしている団体は日本には少なく、日本では問題自体がまだあまり認知されていない。さらにカンボジアの児童買春というトピックに絞れば、特化された組織はひとつもなかったんですね。それなら私がやろう。そう決めて行動していたら、道がだんだん開けて仲間ができたのです。それが本木と青木というふたりの大学生との出会いでした。当時ふたりとも友達のベンチャービジネスを手伝っていたのですが、どうせ起業するなら社会問題にかかわる仕事をしたいと思っていたのだそうです。でも自分の人生をかけてまでやりたいテーマが見つかっていなかった。そんなときにどうしても児童買春をなくしたい、けれども何をしたいのかわからなくて模索しているという私と出会ったのです。彼らは一緒に社会企業でカンボジアの児童買春をなくそう、と言ってくれました。私自身は当時、二十年間キャリアを積んでから活動を始めようと思っていたのです。その時では経験がなかったし、お金も人脈もないのでなにもできないだろう、と。そうしたらこのふたりが、経験がないのだったら経験のある人にアドバイスをしてもらえればいいし、お金がないのだったら少しずついろんな人から集めればいいし、人脈がないのだったら人脈のあるひとに紹介してもらえばいい。足りない部分は周りの人たちに助けてもらいながらやれば、それだけ早く子供たちを助けることができる、と説得してきたんです。その通りだと思いました。それで、仲間が支えてくれるのであれば、やってみようと思ったのです。

2002年の7月に団体を発足しました。けれども、皆がみんな、がんばれがんばれと言ってくれたわけではありません。殆どのひとは、二十歳の女子大生に何ができるのという目で見ていました。団体

を立ち上げてから内容を詰め、職業訓練で東南アジアの児童買春をなくそうというプロジェクトを作ったのですけれども、そうこうしているうちに私は四年生になり、就職活動の時期がきてしまいました。私は親に、かものはしっていう団体を立ち上げたから就職しないと告げたのですが、そうしたらそんなことをやるんだったらでいきなさい、勘当します、と言われました。そんなことになったら次の年から収入はないし、生活できなくなるとあせり、どうしようかと考えました。それまでそのように親に反対されてきたときには、反抗したり家出したりしながら調整をつけてきたのですが、そのときばかりは悩みました。答えが出ないので私は賭けをしたんです。学生起業家選手権で優勝したら活動を続けよう、と。当時そういった選手権はいろいろなところが行っていたのですが、東京都のものは優勝したら300万円くれるというものでした。300万あればまあなんとか生活していけますし、優勝したというので箔がついて親がOKしてくれるかなと思ったんですね。それで申し込んだら決勝まで行ったんです。決勝には十組残りしました。三位以内に入れば300万円もらえる。これはいけるんじゃないかと思って、それまでNGOのことばかりしか知らなかったですから、はじめて経営のことを学びました。試験も通って、プレゼンテーションもして、うまくいくだろうかと思っていたのですが、審査会で票が割れたらしくって、これはボランティアの企画書なんじゃないか、本当にビジネスとしてまわるのか、といった意見がついたそうです。社会的な起業というのがまだ日本に広まっていなかった時期だったので、これを通していいのかという議論が起きたということでした。結果は四位でした。三位以内に入れなかったし、お金ももらえなかった。私たちはこれ以上できないくらい努力しましたが、もう結果は出たのです。優勝者を見ていたら、ああ、これで自分の人生終わったなあ、夢は諦めなきゃいけないんだ、と思いました。それでも、事業モデルは収益がちゃんと入ってくることを説明できなかった部分が弱く、そこをちゃんとつくっていければ大丈夫なんじゃないか、とふたりの仲間は前向きに言っていたので、私もそうだなあと考えるところはあったのです。

とはいえ、この結果を受けてから一ヶ月くらいは本当に悩みました。これから就職活動をするのか、大学院に行くのか、それとも家出してやるのか。そのなかでも、自分が生きてい中で何をやりたのか、最後に死んだときに自分らしく生きてきたかと聞かれて何をしたらイエスと答えられるのか、ということが一番考えました。あがきましたし、いろんな人に相談もしました。他にやりたいことを見つけようともしましたが、無理だったんですね。どうしても東南アジアで見た人たちのことが忘れられない。それで決めたんです。やっぱりやろう、と。

そのために最初に必要だったことは、親の説得でした。親は何故反対するのだろうと考えると、娘が危ないところに行ったり傷ついたりしたときに嫌だと感じるからだろうと思ったんです。それに私は、それまで恥ずかしがって自分のやりたいことをきちんと説明してこなかった。まずは自分の思いを全部ぶつけよう、それでもだめだったら家出しよう、と、一番親の機嫌の良さそうな時をねらって、PCを持って一時間ほどプレゼンをしたんです。私はこれ以外他にやりたいことがなくて、仲間も支えてくれるんだと思いをぶつけたんですね。そうしたらそれまで反対していた親が分かったと言ってくれ、応援してくれるようになりました。大学を卒業してからの私は、月6万円くらいしか収入がない時もあり、年金も払わなくてはいけなかったので実際にはもっと低く、それが2年近く続いたんですね。カンボジアでは何の後ろだでもないな事務所を立ち上げたりという活動を続けてきたのですが、それも親が家に置いてくれて生活面で協力してくれたからやってこれたのだと思います。親族は全員が反対していました。説明しても分かってくれそうになかったので、メディアなどに出始めてから新聞記事などを渡してみたら、次の日には近所中に新聞記事がコピーして配られていたんです。そうやってなんとなく理解を得られるようにしむけていきました。

## ● カンボジアでの活動

大学を卒業してからカンボジアに渡り、事務所を設立しました。今は農村のほうに工房をつくって、貧困家庭から人を受け入れて働いてもらうことで、家庭の収入を向上させて児童買春を防ぐという事業が前に進んでいます。次に、実際に何を行っているのかをこれから紹介します。

### <ビデオ>

実際に活動している内容としては、子どもの笑顔を守るためのコミュニティファクトリー事業をカンボジアで展開しています。そしてこの事業を支えるために、日本でITビジネスをしています。また支援者の方々を募るサポーター事業というのもあり、ふたつの日本での事業がカンボジアでの活動を支えています。

まずコミュニティファクトリー事業ですが、農村に工房を建てて水草やイグサをつかった民芸品や

雑貨の工房を作っています。コミュニティファクトリーの目的は大人に仕事を、子どもに教育を与えることです。子供が売られる理由は、親に仕事がないからです。カンボジアの貧困家庭では特に大人に仕事がありません。カンボジアには産業があまりなく、人口の8割が農村で稲作をしています。農村の貧困家庭を調べてみますと、貧しい家庭ほど土地を保有していないか、あっても狭小なものなのです。そのなかで稲作をしても、自分たちの食べる分のお米すら生産できない。そうしたらどうするかというと、父親が出稼ぎに行くのですが、それでも間に合わないときには子どもが働きに出るのです。それで児童買春の被害にあったり、物乞いの仕事をしたり、ストリートチルドレンになったり、臓器売買の被害にあったりするのです。それをなくすために農村の貧困家庭の大人に仕事を作ろうと思いました。そうしたら子供は両親と一緒に生活ができるし、学校にも行けます。この状況を目指して農村で民芸品工房を建てたのです。最初は都会に工房を建てそこに働きに来てもらおうと考えたのですが、両親と子どもを引き離すというのは、子どもにとって非常に寂しいことですし、学校にも行けなくなってしまうので、なるべく農村で仕事を作ろうとしたのです。

出稼ぎの多い村はアンコールワットに近い場所にあったのですが、アンコールワット近くで売れているものを調べると、タイシルクやベトナムの刺繍や焼き物といった外国のものも多かったんですね。せっかく消費行動がおきているのに、カンボジア国内で生産されたものが売られていない。この状況を見て、私達はここにビジネスのチャンスがあると考えました。それで農村で作った民芸品をアンコールワットに来る観光客に販売することにしました。働いてくれている人には、その収入を賃金として支払っています。農業収入にプラスして3000円あれば、農村ではひと家庭が一ヶ月間生活することがでるのです。この収入によって少しずつ子どもが学校に行けるようになりました。たとえば工房で働いているチャンパイという女の子ですが、彼女がここで仕事を果たしたことによって弟二人が学校に行けるようになりました。先ほどのビデオに出ていたヴァン・ケンは15歳のときから都会に出稼ぎに出ていたのですが、よほど大変だったようで二度と都会には行きたくなかったと言っていました。今はこちらで働いて家族全員を養うことができ、甥っ子二人も学校に行けるようになったということです。このコミュニティファクトリー事業を支えるために、日本で一般企業のウェブサイトを作るITの仕事をしてはいますが、ここからの収入は日本にある事務局の経費などに使われています。

## ● かものはしを通して

はじめから全てが順調にいったわけではありません。納期が一ヶ月遅れてしまい、300万円の借金を背負いそうになったことが21歳のときにありました。お客さんが裁判をするぞと言うほど怒っていたのです。どうしようと恐ろしかったのですが、いろいろな人からサポートをいただいて、それにみんなが最後まで仕事をしてくれて、結局お金は一銭も入らなかったのですが、賠償ということにもなりません。そのとき、もし借金を背負ったら大学を中退して雇ってくれるところを探そうと思いました。家に帰る途中にマクドナルドがあるのですが、その時給が700円で、300万だったら三年あれば返せるかなあ、と考えて。その後はミスも少なくなって、徐々に収入も増えていきました。

なぜビジネスをしているかということ、支援金を集めるには非常に時間がかかるとわかっていたからです。IT事業とサポーター事業を同時期に始めているのですが、やはりITには二倍のスピードでお金が集まっています。ただ、両方入れることで活動が安定するのです。ITの仕事も今後急に需要がなくなるという可能性もありますし、両方から収入を入れることによって事業を安定させられるのです。サポーター事業のほうは個人会員さんや法人会員さんを集めています。NECさんはまったく初期の2003年から応援をしてくださっています。法人会員さんはひと口10万円で、個人会員さんはサポーター会員さんですと月々1000円から。正会員さんというのは、株式会社で言うと株主のようなもので、NPO法上ではかならず募集をしなければならないものです。ほかの会員さんと何が違うかということ、決定権・議決権がありまして、総会において一票を投じることができるのです。たとえば次の年の活動を承認するのか非承認するのかということから、理事を承認するかということまで、意見を非常に強く反映できるので、それを希望される方には正会員になってもらっています。ささやかなお礼としては、報告書をお送りしたり、お金の使い道を伝えるために映像をつくってウェブサイト上で配信したり、毎週ウェブで現地の様子や日本の様子を配信したり、カンボジアを感じられる壁紙を月に一回配信したりしています。

他に、これはサポーター事業がやっていることなのですが、スタディツアーを春と夏に二回ずつ行っています。私たちが活動している実際の場所にきていただいて、コミュニティファクトリーを見学していただいたり、そこに来ている女性たちの家に家庭訪問してもらって生活の実情を知ってもらったりしています。他にキリングフィールド見学など、カンボジアの問題が何故起きているのかを考える機会を持ってもらいます。良い面も悪い面も両方見てもらってそれで理解を深めるという趣旨も

あるのです。私自身も19歳のときにタイにスタディツアーでいったのがそもそもの始まりでした。スタディツアーはこれまで18回行って、350人以上の方に参加していただいています。参加者のひとり、大学4年生だった子は商社に入ろうと思っていたけれども、スタディツアーで人生観が変わって、JICAに行きアフリカに派遣されました。ほかにも教育学部だった子が、国際協力を学びたいと学部を変えたり、テレビなどでこういった問題を見ても、以前は他人事だと思っていたけれどツアーで意識が変わって支援活動を始める子がいたり。高校生の女の子はカンボジアにいて皆が家族を大事にしているのを見て、家に帰ってからはじめてお母さんに手紙を書いて、そしたら家族がとても喜んでくれたという精神的な成長を報告してくれました。ごみ山に行った子はそこで3歳の男の子とであって、日本に生まれただけで生活に不自由なく大学にも行けている自分はなんて甘えていたんだろう、と一生懸命勉強するようになったそうです。

他にインターン生の大学生が11人ほどいらしてくれています。過去にはボランティアの授業を取っていたという国士舘の子も一年ほどきてくれていました。ゆるかも、という制度があるのですが、これにも大学生の方に参加していただいています。

### ● まとめとして

ここまででお話したことのなかで一番伝えたいことは、あきらめずに思い続け、伝え続けていたら、仲間や応援してくれる人が出てきて、その人たちの力をもらって努力し続けた結果、本当にただの大学生だった私たちでもカンボジアで活動を続けられたということです。前に進んだり、思いついたことをひとつひとつ行っていくと、これをやったほうがいいのかとか、方法や工夫のしようがだんだん見えてくるようになります。努力しても変わらないんじゃないかなんて思っていると変わることはありません。前に進んでいくからこそ、チャンスが生まれたり新しい道が開けてくるのだと経験から感じています。今日発表されたグリーンプロジェクトの皆さんは、もう既に一步を踏み出していて、ここで発表をすることでいろんな人に思いを伝えられて、だからまた仲間が増えるだろうし、応援してくれる人も増える。そういう中でまた新しいことが見えてくると思います。

これまでの45分のなかで、私が話したことが皆さんの心の中に少しでも残ってくれたらとても嬉しく思います。ご清聴ありがとうございました。🌍